

幕末松江藩と雨森謙三郎（精翁）

2015 年 4 月 18 日 岸本 寛

1, はじめに

【課題設定】

幕末の松江藩・・・「勤王」「佐幕」「開国」「攘夷」というような枠組みだけではない視点が必要
→変革を余儀なくされていく幕府の諸政策に対して松江藩がどのような対応をとっていったのか
松江藩主と首脳部の対応
※幕末の諸警衛・参勤交代緩和および「長州戦争」

【本報告の素材と方法論】

事例としての松江藩・諸藩周旋方の意義／雨森精翁（謙三郎）と越前系大名のつながり
海防と参勤交代緩和をめぐる動向¹→多様な諸藩を含みこむ視点

【利用するおもな史料】『松江市史資料編近世Ⅲ』、『同資料編近世Ⅳ』収録予定、平田市立図書館所蔵『雨森家文書』、松江歴史館所蔵『志立家文書』

雨森精翁あめのもりせいおう 1822～1882（文政5～明治15）儒学者。松江藩儒。謙三郎は、文政五（一八二三）年五月現在の松江市田町に妹尾清左衛門の三男として生まれる。田村寧我など著名な多くの儒者に師事し、嘉永四（一八五一）年松江市内中原に養生塾を開く。その後、藩主父子（定安・世子瑤彩麿）の儒学相手に任じられるなど、幕末維新期の代表的な儒者として活動。元治元（一八六四）年二月には、従来の功績が認められ、藩主母方の「雨森」姓をうけ、雨森謙三郎として活動することとなる。維新後は公議人として松江藩の代表として出仕するなど官職を歴任し、帰国後は現在の出雲市平田町に塾を開いて人材育成に尽力し明治十五（一八八二）年九月に没。61歳。『島根県大百科事典上巻』[山陰中央新報社、1982年]をもとに作成

2, 松江松平家と越前系

(1) 松江藩の家筋とその関係

幕末政治運動と縁戚関係

越前系の松江藩 津山藩、福井藩との関係は濃密【系図1】

→最後の藩主松平定安 津山松平家からの養子

→幕末期の藩主定安は福井藩主との関係を基軸に展開

理由としては津山藩という将軍系統の血縁を持つ家筋だけでなく、現実的な政治力を持つ慶永こそ重要

①その親密性を象徴（瑤彩麿＝のちの直應の養育に関するやりとり）→【史料1】藩主との書状

②朝廷伺いへの作法をめぐる春嶽と定安とのやりとり

初めての参内と天皇への拝謁で不安になっている定安に対する慶永の対応。【史料2】

③藩主と家臣との関係→家臣ぐるみの関係構築 慶永書状「文左衛門・隼人・謙三郎等へ宜被申入」²

【史料3】定安の返事

④藩主茂昭（越前守）と父慶永（大蔵大輔）との関係

※例えば、副将として小倉に出張した松平茂昭を優先的に輸送

¹岸本 寛「安政・文久期における政治改革と諸藩」（『講座明治維新第2巻幕末政治と社会変動』有志舎、2011年）

²元治元年九月松平定安宛松平慶永書状（福井県図 御書翰八）

3、松江藩の周旋活動と雨森謙三郎

(1) 幕末松江藩の周旋活動―玉藤会と越前会

・諸藩の周旋活動組織 会津藩の公用方や薩摩藩・鳥取藩・岡山藩・津山藩・桑名藩・久留米藩など³

・松江藩の周旋方について 志立範蔵の史料⁴【表1・2】

元治元年9月4日御内用取次役設置（修道館奉行岩佐徳右衛門・軍用方奉行高橋伴蔵・寺社町奉行取調役津川六郎右衛門）三名兼勤、儒者の雨森謙三郎は「懸り合」→「その実使番」⁵

⇒幕末政治が生み出した役職

志立範蔵したちはんぞう 天保9年（1838）～没年不詳。幼名素五郎。松江藩稲塚勘十郎時昭の二男。内用方、祐筆見習屋を経て文久四年（1864）京都勤番、慶応元年（65）大坂勤番、二年右筆格雇、三年内用方添勤番をつとめた。四年の隠岐騒動の折には隠州取締役・出先隊長として隠岐におもむき陣屋を奪回したが、明治四年（71）中央政府より責任を糾明され禁錮一年半の刑に処せられた。廃藩後は松江第七九国立銀行副支配人に就任、自由民権運動にも参加した。『島根県歴史人物事典』〔山陰中央新報社、1997年〕から作成）

表1 志立範蔵のおもな略歴（幕末を中心に）

年月日	職名等
文久元年7月4日	京都固所勤番、扈從番組
文久4年年3月11日	京都勤番
元治元年9月22日	城下固四番備右筆
慶応元年8月4日	大坂勤番
慶応元年9月16日	内用取次役
慶応元年12月11日	在坂中日記役
慶応2年4月10日	右筆格雇、内用方頭取差添
慶応2年10月11日	内用取次役兼京坂詰中日記役
慶応3年2月3日	内用方添勤雇

※「志立家家譜」（松江城歴史所蔵「志立家文書」74）、「志立家代々勤功録」（同77）、「志立範蔵履歴書稿」（同91）「松江藩列士録」（島根県立図書館所蔵）等により作成。

表2 幕末松江藩の周旋方

周旋方詰合	原民右衛門	江戸御留守居在坂中御内用取次役兼勤之心得
	雨森謙三郎	儒者御内用取次役掛り
	広瀬助左衛門	大坂御留守居御内用取次役兼勤
	勝部丹蔵	大坂口方御留守居差添之心得御内用取次役兼勤
	高井義八	御内用取次役見習
	田中弥三郎	御徒目付御内用御使
	渡部勘之助	同上
詰合周旋方向々及吹聴心得方	志立範蔵	浪華勤番、御内用取次役之御用向兼務
京師詰周旋方	妹尾右衛門	御用人
	津川六郎右衛門	京御留守居
	熊沢久左衛門	御徒目付
	石倉廉七	足輕

※「隠岐事件書類二」（志立家文書）より作成。

³家近良樹「会津藩公用方（局）の実態について」（『幕末維新論集―幕末の変動と諸藩』4、吉川弘文館、2001年）等参照。

⁴岸本寛「幕末・維新时期における松江藩と隠岐預所の基礎的研究」（『東京大学史料編纂所研究紀要』23号、2013年）。

⁵中原健次『松江藩格式と職制』（松江今井書店、1997年）。

- ・周旋方の集会は文久3年冬頃より、志立は慶応元年より
雨森謙三郎の強い意向で志立が抜擢される。【史料4】①
- ・玉藤会【表4】 【史料4】②と「親藩会」「越前家集会」⁶
→玉藤会の成り立ちを熟知しているのは謙三郎・・・京坂の周旋全体を掌握

(2) 雨森謙三郎の周旋活動

表3 雨森謙三郎藩政関係略年表(元治元年～慶応2年)		
年月日	関連事項	
元治元年	2月19日	新知100石、格式役組外に任。苗字雨森に改める。
	9月4日	御内用取次役懸り合に任。9月～11月在京。
	10月15日	大坂へ軍議、尾張中納言軍令守護し大坂出立。
	11月12日	内用石州へ派遣、27日帰。
	11月29日	御用あり、芸州広島へ派遣、12月帰。
慶応元年	正月8日	尾張大納言、松平越前守、松平三河守および丸岡使者。正月11日～3月3日帰。
	3月15日	格式組外へ。
	4月11日	因州鳥取、播州明石、備後福山、芸州広島へ使者、大坂表派遣。4月14日～5月27日帰。
	6月21日	内用につき大坂へ派遣。大坂滞在中度々京都派遣、播州へも。6月～11月帰。
	12月4日	大坂派遣、京都へも内用派遣。12月～翌年2月帰。
慶応2年	2月9日	儒学教授任、御内用取次役掛合御免。
	8月3日	小荷駄御備儒者御手当。9月病氣につき帰陣。
※『松江藩列士録』5巻(島根県立図書館、2006年)		

- ・なぜ雨森謙三郎なのか？
藩主および藩同士の意思疎通を担う存在
越前松平家だけでなく諸藩との交渉に不可欠な存在。
- ・元治元年二月松江・福井両藩主同士の対面【史料5】
→松江藩側雨森謙三郎、福井藩側は香西敬左衛門なしでは成立できず
⇒このあと妹尾から雨森への改姓(藩主母方の姓)、知行100石、松江藩士としての格式と職掌設定
- ・謙三郎と家老衆間の意思疎通【史料6】
在京家老の判断と国許家老の仲介役
- ・慶永の書状「謙三郎未だ坂之由嘸々日夜走奔と存候」⁷

4、松江藩の意志決定一家老と雨森

(1) 警衛負担をめぐる松江藩の対応

幕末松江藩の警衛(『維新史料綱要』『定安公伝』)

安政五年六月二十一日、京都警衛

⁶ 『越前藩幕末維新公用日記』(福井県郷土誌懇談会、一九七四年)。慶応元年十月五日には松江、尾州、紀州、水戸、越前、会津の藩士が集まり、翌日越前家集会には松江、越前、川越の藩士の名前があがっているという(藤田新「松江藩士志立範蔵の経歴―隠岐事件を中心として」『海城中学・高等学校研究集録第十六集』1992年参照)。

⁷ 慶応二年正月二十六日付雲国老賢台宛東郭逸介書状(福井県図 御書翰十四)。

文久二年閏九月二〇日將軍滯京の間の二条城警衛
文久三年三月十日幕府より、松江藩は海岸が多いので京都の守備が免
同年三月四日將軍家茂の二条城入りに際し、竹屋口番所の警固
文久三年五月一九日薩摩藩に代わって乾門守衛
同年八月十五日小倉藩に代えて品川第五守衛
文久三年十二月十二日將軍滯京中の京都諸口警衛→定安は従四位上
文久三年十二月二日將軍上洛の供奉船として八雲丸を提供
元治元年正月二十七日將軍上洛中二条城警衛として三条口を守備
同年三月十二日長州備えのため、堺町御門の守衛を免
→繰り替えし発令される警衛とその負担

- ・朝幕双方からの警衛等の負担を回避→松江藩としては幕府に要請していくしか方法がない
松江藩は海岸と隠岐が精一杯、それ以上の負担を軽減する方針
⇒家老衆と幕府老中との交渉のなかで対応
文久3年～慶応2年 大橋筑後、三谷権大夫、朝日千助、赤木文左衛門、有沢能登、今村修礼、大野舎人

- ・警衛の過剰負担がもたらす藩内の危機→過剰負担に耐えきれなくなった藩士等への不安

(2) 参勤交代の復活をめぐる対応 雨森を派遣し対応

- ・松江藩の江戸藩邸…上屋敷（赤坂御門内）、中屋敷（麴町平河町）、下屋敷（品川戸越）、抱屋敷
→同時に存在したのは上屋敷1、中屋敷1、下屋敷3、抱屋敷2⁸
- ・文久2年閏8月の参勤交代緩和→※松江藩の「奥方」「瑤彩磨」の引っ越し（文久3年4月）⁹
→実質的に幕府が諸藩を統制していた枠組みの廃止に近い、諸藩が財政的にも軍事的にも活動が可能
※松江藩の蒸気船購入の意義 文久2年閏8月15日に中根平左衛門・鈴木半左衛門が江戸を出発¹⁰
⇒参勤交代緩和との関係
- ・文久二年に発した参勤交代緩和の撤回
→幕府の制度変更による家老クラスの不信感 幕閣の頻繁な人事異動による結果
⇒これに対する国元の返信「公辺御役人方ニも毎々之御替り合其度毎ニ御法度動き候而ハ、扨々苦々敷事ニ御座候」¹¹…幕府の朝令暮改には懐疑的
- ・元治元年十月十二日、参観順年への対応（長州征討につき、終了後の参府を幕府に申請¹²）
参勤への対応を福井藩と協議／雨森謙三郎派遣
「雲州藩雨森謙三郎福井に来る、去年幕府に於て諸侯の参勤交代室家居住地の制を更に文久二年以前に復せられしか、爾来各藩とも大概これを履行せず、雲州侯にも狐疑せらるゝ所ありし故、公の意見を聞て決せらるゝへしとて雨森を遣はされしなり」¹³→決断は福井藩との協議

⁸ 浅川清栄「松江藩江戸屋敷所在地の研究」（『山陰史談』27）

⁹ 『鳥取県史資料編13』在方諸事控、津山市郷土博物館所蔵「国元日記」等参照。

¹⁰ 鈴木■實『松江藩海軍歴史の研究』（1982年）、同「松江藩海軍歴史の研究補遺」（『日本歴史』437、1984年）等参照。

¹¹ 文久三年十二月十日付国元家老返信（「内外御用状頭書」、『松江市史資料編近世Ⅲ』）。

¹² 『維新史料綱要』。

¹³ 『続再夢紀事』四（東京大学出版会、1974年）。

【史料7】慶応元年二月十四日付松平定安宛松平慶永書状

- ①参勤の幕命については「随順」、ただし参勤はできるだけ回避
- ②妻子の江戸移転についても様子をみながら対応（大坂滞在の問題）
- ③上書については見合わせ

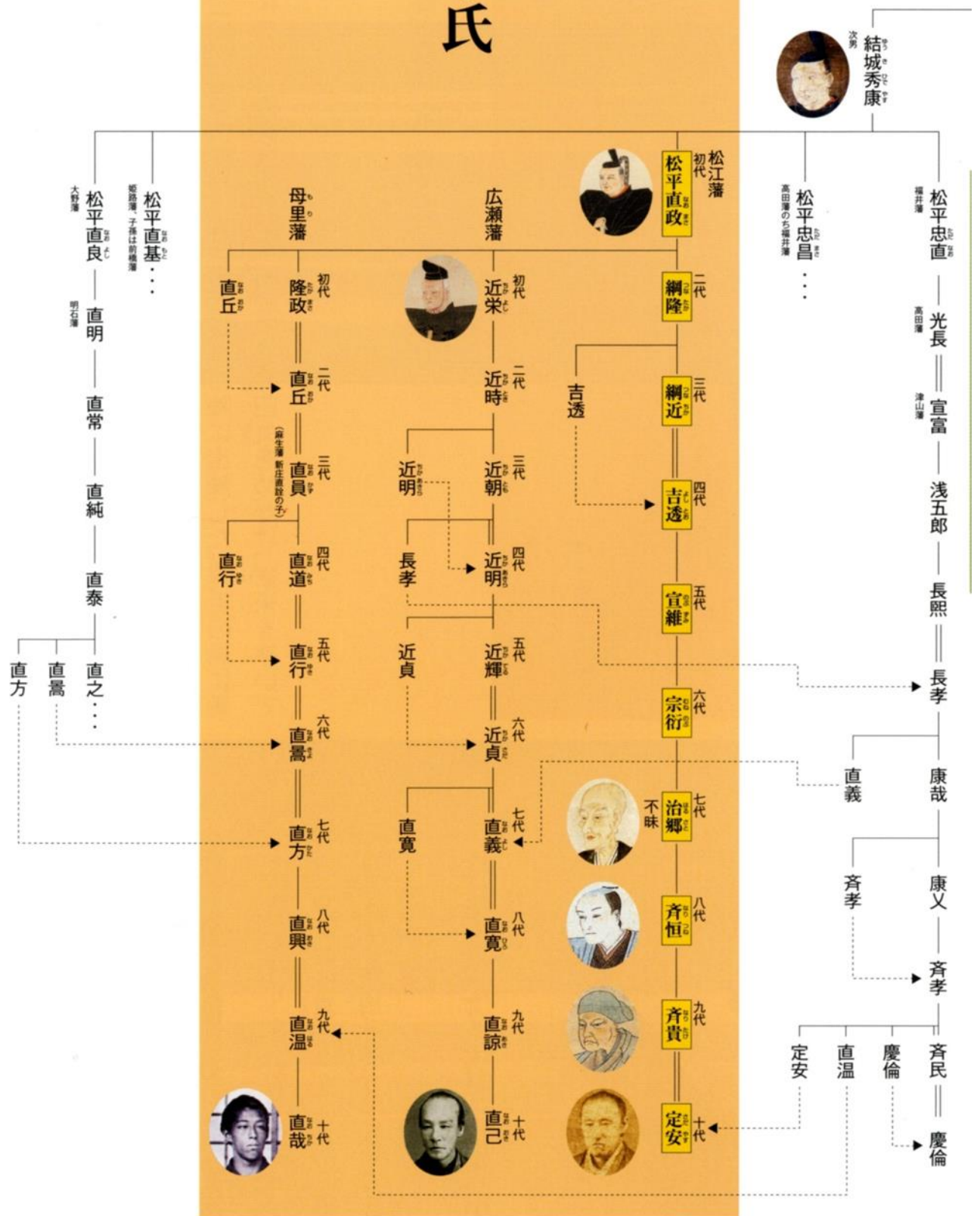
(3) 長州出兵をめぐる松江藩と福井藩

- ・第一次長州出兵 福井藩への全面的援助
諸藩士の相互派遣による意思疎通を実現
- ・繰り替えされる両藩の協力確認（越前系同士のつながりの確認）【史料8】元治二年正月十日定安書状
互いの関係強化を確認・・・香西敬左衛門と雨森謙三郎【史料9】慶応二年二月二十五日松平定安宛松平慶永書状
- ・第二次長州出兵—福井藩の長州再征反対のもとでの意志決定【史料10】
松江藩の窮状への対応に苦慮する福井藩
⇒松江藩との「信義」、幕府への「忠」、福井藩自らの「国是」との関係

5, おわりに—成果と課題

- ・幕末松江藩の政治的な意志決定は越前系の大名家のなかで決定される側面が強い
特に福井藩・藩主松平慶永の存在
- ・幕末松江藩の政治的な活動の中心となった周旋方・・・とくに雨森謙三郎の存在
周旋方は薩長側だけの特権ではない、もっと広い視野で検討すべき
- ・幕末期全体の諸藩の動向をどのように把握するのか→松江藩の研究は新たな可能性を持つ
海防問題などの幕府や朝廷からの負担の解決をどうするのか
参勤交代緩和・妻子の国元移住とその復活に関わる幕命への対応の変容
長州戦争のなかでの幕府・朝廷・福井藩と松江藩
→基本的に幕命は諸藩を規定し続けていると考える
⇒自らの藩の命運を「大藩」との関係で模索する諸藩

松平氏



『松江歴史館展示案内 雲州松江の歴史をひもとく』（松江歴史館、2011年）27頁より

表4 玉藤会

越前	嶋津十太夫	京留守居
	毛口廉之助	御用人
	坂野壮九郎	
	永田儀三郎	
久留米	久徳與十郎	
	今井彦四郎	
	下村貞次郎	
	松岡伝十郎	
安芸	梶川帛蔵	江戸留守居
	野村政次郎	
	家老帯刀息	
肥後	田中友之丞	
	神山源左衛門	
	林新九郎	
備前	花房虎太郎	
因州	安達精一郎	京留守居
	真野代次郎	
津山	口原六郎	
紀州田辺	宮川六郎	
丸岡	北甚右衛門	
	長田八左衛門	
小倉	山田平右衛門	京留守居
	入江宗記	
	徳田彦太郎	
	野嶋要人	
大垣	井田五蔵	
会津	野村左兵衛	公用方
	手代木直右衛門	公用方
	外嶋機兵衛	公用方
	依田源次	公用方
	上田伝次	公用方
	柴太一郎	公用方
	小森久太郎	用人
桑名	森弥一左衛門	
	松浦秀八	
一橋	黒川嘉兵衛	
	渋沢成一郎	
	川村恵十郎	
	水嶋八左衛門	

肥前	福地六郎右衛門	
	長森伝次郎	
丹後田辺	恒川七兵衛	
	安井久米五郎	
	石黒丹介	
米沢	片山仁一郎	
	片倉久左衛門	
対州	大嶋友之丞	御留守居
幕府	太田為之助	御徒目付
	小野勘吉郎	御徒目付
備後福山	大森金左衛門	大坂留守居
延岡	井上貞太郎	
浜田	岡尾朋之丞	
龍野	座光寺紇	
津和野	小野寺六郎	
嶋原	井関寛蔵	
	飯嶋市右衛門	
中津	奥平十郎兵衛	
	跡部弥左衛門	
	佐竹太郎兵衛	
大洲	長尾半蔵	
	菅卓馬	
松山	安藤壮蔵	
	服部嘉門	
土佐	手嶋八郎	
	森岡速蔵	
白川	高松左吉	
	海上久助	
薩州	中路権右衛門	
紀州	伊藤外記	
	中蔵	
大村	長岡儀三郎	
紀州	岡口之進	
平戸	本沢甚兵衛	